

## 鴻と少年

宝町 川元信子

「坊は働くのが厭なのか」

父の修は、病室の自分のベットの上に体を起こして、そう言うたきり黙った。

「おバアは何を言いに来たんだ」

そう思ってタケシは少々不満顔で、ベットの横の丸イスに座って、足をぶらぶらさせながら、窓の外を眺めていた。日差しも弱く、立ち木に生い茂っていた葉も今はほとんどない。

「この前来たのは、夏休みの時だった」

タケシは、丸坊主になった木を見て思い出した。そして父親の言葉を待ったが、父の修は黙ったまま同じ窓の外を見ているだけだ。タケシは、自分から言い出す言葉を持ってこなかった。おバ

アに「父ちゃんの顔見て来い」と言われて来たただけだ。おバアがそんな事を言うときは、決まって「説教してくれ」と言う合図だった。

だが修はいつも叱ることはなかった。「元氣か、勉強してるか」と聞くだけだ。しかし、今日は溜息もまじったような口調で、噛みしめるように言ったのだ。

現在タケシは中学三年生だ。そして今は十一月にはいつている。そろそろ就職先を決めなくてはならない。

昭和十九年生まれのタケシは、春になれば卒業と同時に働く事になっている。同じ年の者は、近頃は高校に進学するようになって

ている。就職はほんのひとにぎりに過ぎない。農家の子は農業学校、職人の家でも弟子子にならず、工業系の学校へ行く。

社会状況は、上向きになってきているし、よほど経済的に困っているか、本人が行くのを嫌がる以外は「あのいえのこが行くのに、うちの子を行かさんわけにいかん」という田舎特有の心情もあつた。

しかしタケシは、中学生になったときは卒業と同時に働くことに決めていた。その頃は田舎は義務教育を終えれば就職するものと決まっていた。校内で「秀才」と言われる者以外上級学校への進学は「お金持ち」と言われる恵まれた家庭の子だけだった。少なくともタケシはそう思っていた。

だが一、二年ですっかり変わってしまった。修は病院にいるとはいっても、本も読み新聞も隅々まで目を通してしているから、社会の状況には誰よりも明るい。

「働くのが厭なのか」は、けつして責めているのではないのだ。でもタケシはおバアが告げ口に来たとふてくされてきた。

自分は働く事を嫌がってはいない。むしろ働きに出て早くお金を稼ぎたいと思っている。ほしいものもいっぱいある。だけでもおバアのもつて来る働き先は、どれも大阪や京都の豆腐屋か風呂屋だった。

在所から出て成功し、地元の若い者をほしがっているのだ。町内には二男、三男でこつこつ真面目に働いて成功した人が多かった。

「豆腐屋はきつい仕事や」おバアが近所の大人に話しているのを耳にしていた。タケシの町の者は良く働く事で有名で、わけてもおバアは「村一番」と言われるほどのはたらきものだった。そ

のおバアが「きつい仕事」と言うのは、相当のものなのだろうとタケシは思った。豆腐屋はともかく、風呂屋は同級生の正夫の家だからよく知っている。釜たきはきつい仕事だ。

それでもタケシは、そんな仕事を嫌ったわけではない。ただ自分の体格や、両親の闘病を考えるとそのような労働に耐えられるようには思えなかった。

しかしタケシは、働かなければならないと同時に、おバアの家を出て住み込みで一人生活せねばならない事情があつた。

タケシたち就職組は、一席に集まり自主勉強をすることになっている。

「進学組は、補習授業でしごかれてかわいそう」と言いながら、羨ましそうな様子を見せる生徒もいた。栄治もその一人だ。栄治は学校内で出来る方だった。タケシは成績は悪くなかったが、勉強は好きな方ではなかった。だが栄治は違った。彼は勉強がしたかった。真面目で学業を疎かにしていなかった。彼は大きな鉄工所の訓練工として、働きながら夜学に行くことになっている。

「タケシ、教室が騒がんようにしておけ、それから勉強のわかんとはちゃんとして教えてやれ」

担任は、いつも補習のときはタケシに言いつけて出て行く。

「栄治に言ってくれ」とタケシはいつも腹の中で不満を言っていたが、おとなしい栄治は教室で騒ぐ連中を黙らせる事は出来ないうで、他の者の勉強を見てやるうとしなかった。

タケシはちゃんぽらんと自分も遊びながら、先生が出て

いったプリントの答えを教えてやった。

教室はタケシのプリントの答えの写し合いをして、問題をかたずけると「就職して稼げるようになったら、何を買う」と言う話をして、みんなで盛り上がった。

「もう勉強せんでもいいがや」勉強が苦手な和夫が叫んで、みんなを笑わせた。

「タケシ、お前どこ勤める事になったん」  
遠縁に当たる国男が聞いた。

「まだ決まらんけど、もうバイクの免許取ることに決めたんや」  
タケシは、わざと大きな声で言った。

「免許なんて取れるわけない」  
和夫は自分も免許はほしいが、また勉強が付いてまわるのと不安そうに言った。

「それが取れるんや」

タケシは誇らしげに、教壇の机の前に立った。

「カンタロー、この間バイクに乗って来たやろ。うれし顔して。それで先生どうしたら免許とれるんやて聞いたんや」タケシはそこでちよつと間を持たせた。就職組の男子全員がかつてないほどの意気込みで次の言葉を待った。

「そしたら、警察へ言つてちよこつとはなしを聞いただけで、あたってんやと」

タケシは得意満面で話をした。

「そんな無理や」

ふだんはタケシの言う事を、いつも感心して聞いてくれる榮治が言った。

「カンタローは大人やし、第一学校の先生やぞ。話聞くだけで

貰えるかもしれんけど、タケシは子供やぞ」

それを聞いて、みんな「そうやそうや、そんなわけないわ」と同調した。

タケシも「そうだろうな」と思わないではなかったが、みんなの手前「やってみないとわからん」と強がった。

三日してタケシは警察へ行った。

「だめだろう」とあきらめていたが、みんなに強がったのでとりあえず聞いてだけ見ようと思ったのだ。なにしろ稼ぐようになったら、バイクが欲しいと常づね思っていたのだから、まず最初の第一歩である。

警察へは一人で行った。大人の自転車を借りていった。警察の受付では、カウンターから少ししか身体の出ていない子供っぽい坊主がバイク免許申請に来たので、まず「子供はだめだ」と言った。

しかしタケシは諦めない。

「二、三ヶ月したら就職するんや。からが小さいさけ、なかなか勤め口がない。せめてバイクの運転できたら、ちつとは有利になるやろう。先生に聞いたら、話聞いただけでもらえるて言うた」

タケシは真剣にねばった。おバアの商売のコツをいつの間にか身に着けていた。そんなつもりはなかったが、涙声になっていた。就職の決まらぬ不安で、このところ落ち込んでいたし、バイクの運転が出来たら、自分の体力にどれだけ有利になるだろうと思つていた。

係官は同情したのか、それとも無免許で乗ったりしては厄介だと思つたのか、学校と住所氏名を聞いて、後日連絡すると言つて

くれた。

しかし連絡はなかなかこなかった。

「タケシ、お前まだ行くところ決まらんのか」

担任の加藤先生のところへ、就職組のプリント問題を集めて持っていた時、前の席に座っている田口先生が、タケシに声をかけた。

日頃からタケシに「おバア泣かすような事すんな」と田舎言葉で、近所のおっちゃんのような説教をする。四十歳半ばで、世間に明るく磊落な先生だった。

「お前が一番先に決まると思ってたにな」

そう言うと、タケシのきやしゃな身体を見て一瞬黙った。

「わしの遠縁になるんやが、肉屋はどうや。毎日肉食えるぞ。大きい肉屋で、会社になつとるし、寮もある」

「真面目にやれば、将来肉屋の店を持てるかもしれんぞ」

田口先生は、真面目な顔で言った。

タケシの頭の中に「商売」という字がよぎった。そして今度は希望が持てそうな気がした。

加藤先生のほうが、タケシより先に「よろしくお願いします」

と田口先生に頭を下げた。タケシも慌ててそれに習った。

職員室に残っていた教師みんなが「よかった」と言う顔をした。

次の週の日曜日、田口先生に連れられて「中や肉株式会社」へ行った。

会社は大工場と言うわけではないが、清潔な工場だった。タケシはいままでにはなかった「清潔さ」が気に入った。

社長室らしい事務所で、先生と一緒にお茶と菓子をやばれた。タケシはカチカチになっていた。来る前に慌てて食べたアンパンが胸につかえていて、いつもなら真つ先に手の出そうな栗饅頭に出なかつた。

先生は社長と冗談を言いながら、世間話をしている。タケシのことは前もって話をしようだ。

「柄は小さいけど頭はいいし、今すぐにも間に合う子や」  
田口先生は初めて褒めてくれた。

「うちはオートメ化してるさかい、からが小さくても大丈夫や」と言つて、社長は笑いながら立ち上がり「社内見学してもらおうか」と先に歩き始めた。タケシは社長について歩いた。先生はタケシの後をついて来た。一人前扱いをされてタケシは誇らしかつた。

「ここがうちの心臓部や」

社長は、大きな鉄の扉の前に立つと一気に開いた。

冷気が顔にかかった。タケシの背ほどある水の柱が見えた。次にタケシは気を失いそうになった。上の方から足の付いた牛のバラが、S字の金具にぶら下がって並んでいた。脂肪の塊が白くにごって見えるものもあり、赤い肉の付いたアバラをみせているものもある。足はその形のままぶらさがっている。

タケシの顔色が変わったようで、大人二人は笑いながら「びっくりしたか」と言つて戸を閉めた。

歯が鳴っているのが自分でもわかつた。以前飼っていた牛のこを思い出したからだ。

学校から帰ると、牛舎が空になっていた。かいは桶もなくなつて掃除もすんでいた。

「牛は」

タケシは玄関の上がりぶちに腰掛けているおバアに聞いた。

「ああ、やってしまった」

おバアは小松菜を小束にしながら、簡単に言った。明日町へ売りに行く分だ。タケシは、今時牛なんか欲しがいる人がいるんやと思つた。

「じろ田の父ちゃんが、潟の向こうに舟置いてきたさかい、こっちへ廻しておいてくれと」

おバアは、貝すきで世話になつた舟の持ち主のおつちゃんの事は断れない。タケシは子供ながら、こんな仕事はわけがなかつた。それに牛がなくなつたので、餌やりや、牛を洗いに潟へ行く仕事がなくなつてうれしかった。

牛は一五六センチのタケシより低かつたが、体は大きい。餌をやるうとすると勢い込んで、かいは桶に頭を突つ込むのでタケシは飛ばされてしまう。だから牛の尻をたたいて、小屋を一回りするように仕向ける。その間に、かいは桶に餌を入れてやる。

この辺り以前は牛を苦役に使っていたが、だんだん機械化が進んで牛を飼う家はほとんどなくなっていた。

タケシは仕事が減つたのを喜んでいて何も考えなかつたが、あの牛はあんな風になつてしまつたんだ。ペットではないので「牛、牛」と呼んでしぶしぶ世話をしていたが、目の前にそれがぶら下がっているのを見て、怖いというのと同時に「可哀想」という気持ちがあつてきた。

しゃべらなくなつたタケシを見て、先生は「帰るか」と言った。タケシは「うん」とうなずいて、先生の後に従つた。

社長が黙つて、栗饅頭をタケシのポケットに入れた。タケシは黙つたまま頭を下げた。二人は黙つて歩いた。先生は自転車を押していた。

タケシの町の入口で、先生と別れた。別れ際に「厭なら断つていいんだぞ」と、先生はボソツと言つた。

タケシは断る決心はしていたが、どんどん勤め口が狭まつていくのがはつきり自覚出来るので、まっすぐ家には帰りたくなかつた。タケシは潟によって行こうと思つた。

「家」といつても仮住まいみたいなものだ。

父と同じ病院に入院していた母が病院で死んだ。その前に幼児の頃から、母の実家のおバアのところへ預けられていた。

末っ子の叔父が所帯を持ち、子供が二人になつた。小学校三年と五歳の従兄弟だ。おバアは年をとつて、叔父の収入に頼るようになっていた。早くに後家になつたおバアの家は、田舎家だが小さい。四畳半のおバアの部屋に小学三年の孫とタケシの三人で寝る。

タケシはどうしても、住み込みの出来るところへ勤めなければならなかつた。

タケシは手先が器用だから、大工見習いと言う人もいたが、その頃は大工は個人事業だから、自宅通いだつた。一番人気の鉄工所は環境が悪く、親の病氣のことを考えると、タケシは見学の後ことわつた。

田んぼの畦道を歩いていると陽が翳つてきた。タケシの心に色

んな不安が押し寄せてきた。さつき見た牛の姿が現れた。揺れているようなのが怖かった。家にいた牛の顔がはつきり思い出された。

とたんに胸がむかむかして来た。タケシは田んぼの用水の上に頭をのぼした。同時に吹き上げるように吐いた。さつき食べたアンパンのようだ。「ドドドド」と用水に落ちて水が跳ね上がる。アンパン一つ分より多く出た。出てしまうと不快感も不安も少しになった。

濁の付近はうつすら夕闇に包まれていく。厚い雲が垂れ込めているのに、時折切れ間から強い日の光が漏れる。自然は一番寂しく、厳しい季節なのに、タケシは自分がとても柔らかいものに包まれているような気持ちが出てくる。

おバアや自分を養ってくれていた濁と周りの自然を、初めていとおしく思った。ただの遊び場みたいに思っていたこの風景と「離れたくない」と思っていることに初めて気付いた。

「絶対、都会にいかん」そう決心した。でも勤め先がない。第一自分が何がしたいかわからない。出来ない事だけがわかり、それがどんどん増えてゆく。

「俺、わがままなんやろか」

タケシは心細くてならなかった。仕事を選べる境遇ではないことは、早くからわかっていたつもりだった。だが今はつきり思い知らされた気がする。

「坊は、働くのが厭なのか」と言った父親の顔が浮かぶ。

ああ、本当は学校へ行きたい。米治のように勉強好きではないけど、もう少しみんなとワイワイいって遊びたい。クラブ活動をやってみたい。ほんのちよとの間でいい。

自分の本音にきづくと、胸が痛くなった。胸に手をやると、粟饅頭のふくらみに当たった。「おバアにやろう」タケシはポケットの上から、それをたいた。

今度の話は、期待を持って待っているはずだ。そんなおバアと顔を合わせるのが辛い。

頭の中がいろんなもので、パンパンに膨らんでゆくような気がする。

また酸いものが上がってきた。タケシは用水に顔を出した。のどから「ゴワア」と言う声が出て、黄色っぽい水が出た。胃が締め付けられるようだ。わざと声を出して用水に向かい叫んだが、何もでない。

涙が、ひっきりなしに頬を伝った。からいたきのせいではない。たった今生まれた自覚のためだった。

